資料室 【稲むらの火】～安政地震津波の顛末～

かつての国語教科書や、ラフカディオ・ハーンの小説でも伝えられなかった本当の「稲むらの火」です。

濱口梧陵の偉業「百世の安堵を図れ」はこの実話の中に生きています。

1 枯れた井戸の水

今から 150 年ほど前のある冬の朝、広村に地震*が起こりました。

いつもと違う海に、村人たちは津波を心配して広八幡神社に避難しましたが、被害がなかったことを喜びあいました。

ところが次の日のお昼過ぎ、あわてて梧陵さんの家にかけ込んできた村人が言いました。

「えらいこっちゃ、井戸の水が枯れているぞ！」

＊1854 年（安政元年）12 月 23 日午前 10 時に起こった、のちに安政東海地震とよばれた地震です。全国で 2000～3000 人がなくなりました。

2 大地震だ！津波だ！

夕方の 4 時。きのうの地震とは比べものにならない大きな地震*が起きました。

家が倒れ、かわらが吹き飛びました。ドーッという、大砲がとどろくような音が何度も聞こえ、黒いすじ雲がみるみる広がっていきました。

そしてついに大きな津波が押し寄せてきました。「にげろ！丘にあがれ！津波が来たぞ！」

梧陵さんは波にのまれながらも必死で村人たちにそう叫んで、広八幡神社へと避難を呼びかけました。

＊この地震はのちに安政南海地震とよばれ、全国で数千人がなくなりました。

3 命の火、「稲むらの火」

津波は川をさかのぼって家や田畑を押し流したあと、今度はすごい勢いで海へ引いていきました。

あたりはひどいありさまで、おとなも子どもも家族をさがして叫びまわ

っています。

梧陵さんは、暗やみでどこへ逃げればいいのかわからずさまよっている人がいるにちがいないと考えました。

とっさに、「そうだ。もったいないが、あの丘の稲むらに火をつけよう」と、積み上げられた稲の束に火をつけてまわりました。すると、逃げおくれた村人が次から次へと火を目指して丘にのぼってくるではありませんか。「ああ助かった、この火のおかげや」9 人目の村人が避難を終えたそのときです。さらに大きな津波＊が押しよせて、稲むらの火も波に消されていきました。

＊このときの津波がいちばん大きく、この後も何度も津波が押し寄せては引いていきました。

4　生きる希望

津波で家族や家、仕事を失った村人たちはうろたえるばかりでした。

村を捨てて出て行こうとする人もいました。梧陵さんは考えました。「このままでは村がほろびてしまう。広村で生きていける方法はないものだろうか…。よし、浜に堤防を築こう。村人に働いてもらってお金を払い、生活に役立ててもらおう。そうすればきっと、生きる希望もわいてくるはずだ。」

地震のあとの炊き出しで、蔵の米もすっかりなくなっていましたが、梧陵さんは家族や店の人＊に村を守りぬくための協力を求めました。

＊梧陵さんの家は、広村と千葉県の銚子というところで昔からしょうゆを造っていました。店や工場ではたくさんの人が働いていました。

5　広村堤防

広村の人たちは、梧陵さんの決断に心の底から感謝しました。畑の仕事や漁の仕事をしながら、一所けん命に働いて堤防を造っていきました。4 年がかりで大きく立派な堤防が完成し、海側には松の木を、土手には、はぜの木を植えました。

長い年月がたちました。広村に大波がおそってきましたが、村は堤防のおかげで守られました。大きい地震*があったときにも、津波は村に入ってきませんでした。

今も広村堤防は広川町の人びとを守り続けてくれています。

＊1946 年（昭和 21 年）12 月 21 日に昭和南海地震が起こり、4m の津波がおそいましたが、堤防に守られた地域は無事でした。

資料室 【濱口梧陵】

資料室 ●濱口梧陵 **●稲むらの火** **●津波防災**

濱口梧陵は広村（現在の広川町）で分家濱口七右衛門の長男として生まれ、12 歳の時に本家の養子となり、銚子での家業であるヤマサ醤油の事業を継ぎました。

安政元年（1854 年）、梧陵が広村に帰郷していた時、突如大地震が発生し、紀伊半島一帯を大津波が襲いました。

梧陵は、稲むら（稲束を積み重ねたもの）に火を放ち、この火を目印に村人を誘導して、安全な場所に避難させました。

しかし、津波により村には大きな爪あとが残り、この変わり果てた光景を目にした梧陵は、故郷の復興のために身を粉にして働き、被災者用の小屋の建設、農機具・漁業道具等の提供をはじめ、各方面において復旧作業にあたりました。また、津波から村を守るべく、長さ 600m、高さ 5mの防波堤の築造にも取り組み、後の津波による被害を最小限に抑えました。

梧陵は、他の分野においても優れた才能を発揮しました。教育面では、江戸時代末期に濱口東江、岩崎明岳とともに私塾を開設し、剣道や学業などの指導にあたりました。この私塾は後に「耐久社」と呼ばれ、変遷を経て現在の耐久中学校になっています。

明治 4 年（1871 年）に梧陵は大久保利通の命を受けて駅逓頭に就任したのをはじめ、明治 12 年（1879 年）には和歌山県議会初代議長に選任されました。議長辞任後は木国同友会を結成し、民主主義を広める活動を展開しました。

明治 18 年（1885 年）梧陵の長年の願いであった欧米への視察途中、ニューヨークにて永眠しました。

濱口梧陵年譜

西暦（旧暦）（年号）	年齢（数え年）	梧陵名前	梧陵年譜　＊マークは時代背景
1820 年（文政3年）	1 歳	七太	六月十五日　紀伊国広村に生まれる。幼名　七太
1821 年（文政 4 年）	2 歳		正月十八日　実父七右衛門　没する
1823 年（文政 6 年）	4 歳		＊勝海舟生まれる
1825 年（文政 8 年）	6 歳		＊二月　外国船打払令
1831 年（天保 2 年）	12 歳	儀太	本家養子となり儀太と名乗る
			初めて江戸を経て銚子に赴き家業に就く
1834 年（天保 5 年）	15 歳	儀太郎	元服し儀太郎と改める ＊福沢諭吉生まれる
1837 年（天保 8 年）	18 歳		祖父濯圃　没する ＊二月　大坂で大塩平八郎の乱
1839 年（天保10 年）	20 歳		湯浅　池永右馬太郎の娘、まつと結婚する ＊蛮社の獄
1841 年（天保12 年）	22 歳		三宅艮斎との出会い ＊三宅艮斎、銚子に開業
1848 年（嘉永元年）	29 歳		長女たき生まれる
1850 年（嘉永 3 年）	31 歳		佐久間象山の門に出入りする ＊勝海舟、兵学塾を開く
			勝海舟との出会い
1851 年（嘉永4年）	32 歳		崇義団を起こす
1852 年（嘉永5年）	33 歳		広村に稽古場（私塾）を開設する
1853 年（嘉永6年）	34 歳	儀兵衛	三月　七代儀兵衛襲名
			養父　保平　没する ＊六月　ペリー艦隊が浦賀に来航する
			老中小笠原壹岐守を介し海外渡航を図る
			次女　みち　生まれる
1854 年（安政元年）	35 歳		安政大地震津波に「稲むらの火」を掲げ村民救済 ＊三月　日米和親条約締結 ＊十一月　南海地震津波
			大堤防築堤を決心、被災民のために全力を尽くす
1855 年（安政2年）	36 歳		正月　築堤の許可を得るため「内存奉申上口上」の書を藩へ送る
			広村堤防築堤開始、津波被災民救済事業を継続する
			広村に浦組を組織し、若者を訓練する

			広橋を架けなおす
			稽古場を建て直す
			広村の民による「濱口大明神」建立計画を取りやめさせる
			江戸の持店が震災に遭う ＊十月　安政江戸地震
1856 年（安政 3 年）	37 歳		救済事業の功労により和歌山藩より独礼格を賜る
1858 年（安政5年）	39 歳		江戸に関寛斎を送り、コレラ防疫にあたる ＊伊東玄朴らによりお玉が池に種痘館が創立される
			広村堤防完成 ＊福沢諭吉が私塾（後の慶応義塾）を開く ＊江戸の種痘館火災
1859 年（安政6年）	40 歳		種痘館再興のために三百両を寄付
			勝海舟に咸臨丸同乗を誘われるが断念
1860 年（万延元年）	41 歳		＊咸臨丸就航　勝海舟、福沢諭吉ら渡航
1861 年（文久元年）	42 歳		医学研究費用として西洋医学所に四百両を寄付 ＊十月　種痘館が西洋医学所と改称
1863 年（文久 3 年）	44 歳		＊天誅組の乱
1864 年（元治元年）	45 歳		ヤマサが最上醤油の称号を得る
1866 年（慶応 2 年）	47 歳		広村稽古場を耐久社と命名
1867 年（慶応 3 年）	48 歳		＊戊辰戦争　大政奉還
1868 年（明治元年）	49 歳		一月二十九日　抜擢され紀州藩勘定奉行となる ＊明治維新　勝海舟、江戸を戦火から守る
1869 年（明治 2 年）	50 歳		一月　孔雀之間席並びに参政となる
			二月　大広間席学習館知事となる ＊藩籍奉還
			松山棟庵とともに共立学舎設立に奔走する
			四月　藩主に随行して上京
			八月　有田郡民政知局事となる 養老滋幼の御教令
			十月　名草郡民政知局事兼帯となる
			十一月　和歌山藩小参事となる
1870 年（明治3年）	51 歳	梧陵	養子梧荘を八代儀兵衛とし、これより梧陵を通称とする
			二月　松坂民政局長となる
			十二月　和歌山藩権大参事となる
1871 年（明治4年）	52 歳		五月　東京藩庁詰となる
			七月　駅逓正となる

			＊七月　廃藩置県
			八月　駅逓頭となる
			同月　和歌山県大参事となる
			十月　本官を辞し、権大参事の心得を以って事務取扱となる
			十一月　和歌山県参事となる。
1872 年（明治 5 年）	53 歳		二月十三日　参事を辞職する ＊郵便、戸籍、学制、鉄道、太陽暦等新職制度が敷かれる
			六月二日　息子　擔　生まれる
1877 年（明治 10 年）	58 歳		＊西南戦争
1878 年（明治 11 年）	59 歳		自修舎維持のために尽力する
1879 年（明治 12 年）	60 歳		国会開設建言の惣代となる ＊自由民権・国会開設請願運動が全国で起こる
			和歌山県初代県議会議長となる
1881 年（明治 14 年）	62 歳		銚子汽船株式会社を設立する ＊十月　国会開設の詔勅が下る ＊板垣退助が自由党を結成する
1882 年（明治15年）	63 歳		十二月　木国同友会を組織する ＊大隈重信が立憲改進党を結成する
1884 年（明治17年）	65 歳		五月三十日　横浜出帆　海外渡航に旅立ち米国に渡る
1885 年（明治18年）	66 歳		米国ニューヨークにて客死
			福沢諭吉、勝海舟らが横浜で会葬を営む
1892 年（明治 25 年）			耐久社が耐久学舎と改称される
1893 年（明治 26 年）			広村に記念碑建立
1897 年（明治 30 年）			銚子に記念碑建立
1903 年（明治 36 年）			息子擔、英国留学中に行った講演会で、ステラ・ラ・ロレッツ嬢の質問によりラフカディオ・ハーン『生ける神』の主人公五兵衛の実子と判明、講演会で大喝采を浴びる
1908 年（明治 41 年）			中学校令により、耐久学舎が私立耐久中学校と改称
1915 年（大正 4 年）			十一月十日　大正天皇即位の大礼にあたり、梧陵の多年の功労に対し従五位を贈られる
1916 年（大正 5 年）			和歌山県議会四十二人が梧陵銅像の建立を計画
1920 年（大正 9 年）			四月十日　梧陵銅像建設除幕式
1938 年（昭和 13 年）			広村堤防、梧陵墓、国指定史跡となる
1967 年（昭和 42 年）			耐久中学校庭に梧陵銅像を建立

資料室 【津波防災】～梧陵の防災精神を受け継ぐ広川町の人々～

忘れたころにやってくると言われる災害。梧陵の恩恵を語り継ぎながら、日頃の心構えを養うことの大切さを広川町のあゆみは教えてくれます。

受け継がれる精神　堤防を守るあゆみ

1855 年（安政 2 年）	広村堤防着工
1858 年 （安政 5 年）	広村堤防完成
1903 年 （明治 36 年）	津浪祭のおこり 1854 年（安政元年）の大津波により犠牲になった人々の霊をなぐさめ、かつ大防波堤を築いてくれた濱口梧陵らの偉業とその徳をしのび、広村の有志の人々が 50 回忌を記念して旧暦の 11 月 5 日に堤防へ土盛りを始めたことが、現在も行なわれている津波祭の始まりである。
1904 年（明治 37 年）	広村堤防の松林が防潮防風保安林に編入される
1913 年（大正 2 年）	風津波（高浪）から広村を守る
1926 年（昭和元年）	赤門　防潮扉の設置　通路のため広村堤防一部切り通しのところへ鉄扉をつける
1933 年（昭和 8 年）	感恩碑建立　津浪祭に除幕式挙行 「感恩碑の由来」出版（濱口恵璋著）
1936 年（昭和 11 年）	広村堤防補修を終える　記念碑建立
1937 年（昭和 12 年）	国定教科書に「稲むらの火」（中井常蔵著）採択
1938 年（昭和 13 年）	広村堤防　国指定史跡

	 写真提供:津村建四朗氏
1940 年(昭和 15 年)	今村明恒博士の「『稲むらの火』の教え方について」を再販
1944 年 (昭和 19 年)	東南海地震　津波から広村を守る
1946 年 (昭和 21 年)	南海地震　津波から広村を守る
1947 年(昭和 22 年)	昭和天皇の行幸に際し濱口義兵衛(梧洞)「防波堤および防波林の由来」言上 今村明恒博士の「南海沖地震津波、昭和の南海道大地震につき広村の人々に寄す」の一文が広村に寄せられる
1951 年(昭和 26 年)	広湾一帯の護岸改修工事を始める
1952 年(昭和 27 年)	「津波略史と防災施設」を出版
1961 年(昭和 36 年)	広湾一帯の護岸改修工事の完成
1967 年(昭和 42 年)	濱口梧陵翁銅像耐久中学校校庭に完成
1980 年(昭和 55 年)	新たに赤門　防潮扉の設置

1985 年（昭和 60 年）	濱口梧陵翁没後 100 年・追悼式と記念講演会
1987 年（昭和 62 年）	「稲むらの火」作者　中井常蔵氏防災功績者として国土庁大臣表彰
1993 年（平成 5 年）	広村堤防整備工事を始める
1997 年（平成 9 年）	庁舎前「稲むらの火」広場に″梧陵翁像″建立
1998 年（平成 10 年）	広川町にて全国沿岸市町村津波防災サミット開催
1999 年（平成 11 年）	皇后が記者会見で防災対策とのかかわりで「稲むらの火」に言及
2002 年（平成 14 年）	第 100 回津浪祭開催
2003 年 （平成 15 年）	第 1 回稲むらの火祭り開催　松明行列を挙行
2005 年（平成 17 年）	子どもたちへの防災教育充実のための「稲むらの火協議会」が発足
2007 年（平成 19 年）	濱口梧陵記念館と津波防災教育センターから成る「稲むらの火の館」開館